

人間苦と救済の自覚

苦楽

地上には苦もあるし、楽もあります。苦は誰でも好まず。楽は一切人の求めてやまぬところであります。

人間の大部分はみんな楽を求めて働いています。どうしたら楽が得られるだろう、つづけられるだろうとそれに頭を悩まします。よし今は苦しんでいても、幸福が前途にあるということを考えればこそ苦を忍びもしているのです。

「あなたは毎日何をしています。」

大部分の人にこの問いを与えた時、もし飾らないで言ってくれるなら、大概の人は「金」を得るためにありはしないでしょうか。金を得て楽に暮したい。目は楽にそそがれ、努力は金儲けにはらわれます。けれども果して金によって楽が買われるでしょうか。楽に顔をむけて走って行けば苦は後より迫いかけます。そうして苦に一度とりつかれた時、楽しみは一度に打ちくだかれてしまいます。

人間苦

「八相為苦。所謂生苦。老苦。病苦。死苦。愛別離苦。怨憎会苦。求不得苦。五盛陰苦。」(涅槃經 十二)

一。生苦

生苦とは生れ出づる苦しみであります。女が子を生む時は命がけであります。青い竹さえ握りつぶすといわれます。生みの苦、生れ出づる苦しみ、これをのがれるものは一人もありません。

二。老苦

鬼も十八。番茶も出ばな。若い人たちの顔は、美しい花であります。力も強く体も元気で、人生の春は若人の上にある。白髪を墨で染めた斉藤別当ならずとも、老いを好む人はありません。としとることは嫌であります。年々に増して来る縮緬皺は、鉛白や紅でつつもうとしても出来ませぬ。九州の方の博士が、若返り法を研究したと云えば我も我もと走ってゆきます。けれども老いゆく淋しさをどうして棄てられようぞ。

三。病苦

達者で暮す者ほど幸なことはありません。けれども体は病の器であります。四百四病どころか、新しい病気は年々増して、何時、如何なる病に侵されんともはかられませぬ。一度病にとりつかれた時、人は見るかげもない者になってしまいます。

四。死苦

「死は生きとし生ける者の免るべからざる運命なり。それ唯免るべからざる運命なり、故に又避くべからざる問題なり。されど生を惜しむ人はあれども死を惜しむ人は少なく、生に就いて慮る人はあれども死に就いて考ふる人は称なり。」とは高山樗牛博士の「死と永生」の一節であります。死を一度考える時、如何にふざけた者も忽然として襟を正さざるを得ないのであります。死は一切の終りであります。人生最大

の事実であります。ナポレオンも死にました。小野小町も死にました。豊太閤も、伊藤公も、今は昔の物語り、「出づる息は、入る息を待たず。」とか、電光朝露の夢か幻か、露の命は草葉に吹く風にも散る。

五、愛別離苦 独生独死。独り生まれて独り死ぬる。短かきは電車の中の乗り合せから、長きは夫婦、親子の何十年。でも一度、会った者は、一度は必ず別れねばならぬ。人一人をでも真実愛したことがある者は、別れる度に泣かねばならぬ。生別、死別。幸福に暮っていた家庭にでも、可愛い子供が死んだ時、夫婦の人生観は変わって来ます。吉野山の雪の中で、九郎判官義経と、愛人静御前とが涙した別れの涙、子供と別れる教師の涙、別れの苦しさは死よりも辛いとさえいわれます。でも一切と一度は別れねばならぬ。

六、怨憎会苦

いやな人、にくい人、憎悪する人と共に暮さねばならぬ苦しみであります。「嫁と姑はかたきの出会い」と申します。釈迦に提婆、キリストにユダ、地上一切人に、怨みを結び、呪いを送って暮さねばならぬ苦悩があります。別れたくない人には別れねばならず、悪い者とは一緒にいねばなりません。「悪縁、契り探し。」とか、運命と運命とを傷つけあつて、爪と牙とで、生血をすすりながらも、一家の内に、一村の内に、一社会の内に生きて行く人間生活は、さながら地獄そのものであります。怨憎。この二文字が地上から消える時がない限り、地上には不幸なる敵と敵との戦いがつづきます。人と人の喧嘩があります。地上は永へに汚れています。悪業と悪業とのもつれは幾度か、仇と生れ、敵と表れて、その怨みを果し合わねばならぬのでしよう。

2

七、求不得苦 求めて得ざる苦しみです。金がほしい、名誉がほしい。地位、男、女、その外、何でも人は求めてやみませぬ。けれども、心のままにはなりません。貧しいのは苦しいものであります。財産のほしくない者は一人もないけれど、求めても求めても得られないのです。若い時は、美しい虹のような、希望を持っています。何でも得られそうな自信があります。心は輝きに充ちています。けれどもその虹は年とるままに失せて行きます。希望は裏切られ目的通りには出来ないので。女学校出の女は理想が高いと云います。理想の高かったお嬢さんも、今は二人の子供をつれて、小役人の妻として台所の偶にやつれています。末は高位、高官、代議士か博士か大臣かと夢見て大言壮語した当代の小英傑も、今は屬吏として古ぼけた机に老いぼれています。求めて得ざる苦しみ、誰ものがれ得ない苦であります。

八。五盛陰苦

又、五陰盛苦ともいいます。五陰とは身心の総体であります。生きるために受くる一切の苦しみであります。生きるためには、種々な複雑な苦しみを受けねばなりません。

以上が人間の四苦八苦であります。生ける人は皆、この四苦八苦を一人ものがれることは出来ませぬ。智者も苦しみます。学者も苦しみます。富者も、貧者も、老若男女、貴賤貧富、一切人の一生は、こうした苦しみに彩られ、綴られて行きます。

衣服がほしいが買えないというお嬢さんの小さい苦しみから、思うほどの成績がとられないで親に叱られる小学校児童の苦しみから、一切の人の胸には常に何等かの苦しみが悩まれてあります。「苦が変わるばかりだ」といいますが、一苦去つて、一苦来り、一難来つて、一難去る、迷う人の心の上には苦のない時はありません。

「苦からのがれたい。不幸から去りたい。楽がほしい。幸せがほしい。」
たった一個のこの問題のために人はただ眼前のみに気をとられて動き働いているのではありますまいか。

町を歩む人は美しい。酒のむ人の顔は晴れている。けれどもその人たちの赤裸々な胸に入つて、偽らない魂の声を聞いた時、そこに何の苦もないのでしようか。

華かな街の裏、表面的な社交の裏、そこに食い入つて、人々の生きた魂にふれた時、涙に充ちています。悩みに充ちています。苦に追われながら、幸を追いながら毎日毎日が暮れてゆく。貧ほど辛い病はないといいますが、貧しき者の毎日は人にも言えぬ苦しきです。あれほど、沢山縦横に走っている街の人の大部分は「金」という問題に動いています。もし一寸油断して、一朝つまずけば、大身代もなくなつてしまします。だからただ考えている問題は金であります。

「あなたは毎日何のために働いていますか」

「金を儲けるためであります」

「金を儲けてどうします。」

「老後を楽に暮したいと思ひます。」

一応はもつともあります。老後に貧しいほどなげないことはありません。病気の時、金がないほど辛いことはありません。子供が多いのに金がないほどつらいことはありません。若い時、元気な時、しつかり働いて貯蓄しておくことは大切なことでもあります。

けれどもほんとうに人生の四苦八苦を金でなくすることが出来るでしょうか。もし苦を金で去ることが出来るならば、人生の幸、不幸は、金で測量することが出来ません。

人間の幸福、楽は、そこに不幸や苦が表れた時、一度に崩されてしまします。家を建ててその祝いの宴を張っている嬉しさの中に、主人が急に病になつた時、もう、家でも祝いでもなくなりません。会った楽しさの裏には別れの悲しさがひそんでいます。金殿玉楼の内に住む人にも、怨憎会苦に泣いている人があります。楽の中に苦が出たら、楽は消えててしまします。

然れば金を持つて、苦を亡ぼし得るか。金の力は相対的のものであります。いちおうは力であります。けれども、よく考えた時、人生の四苦八苦のいづれをも金の力でどうすることも出来ぬのです。生老病死の四苦は、上は帝王より下は乞食に至るまでのがれませぬ。けれども富める者、命が長いかぎらず、医院へ何里もある田舎が命が短いこともなく、博士にとりまかれて病院の白いベットの上で七転八倒苦しむ者もある。金の力では、願のしわ一枚も、頭の白髪一本をも、如何ともすることは出来ませぬ。

親子が別れたり、夫婦が別れたり、全て愛別離苦に泣いた者には、別れの苦しきほど辛いものはないが、それを金ではどうも出来ぬ。呪いあい憎みあつて生きておらねばならぬことは、富者も貧者も皆然りである。

全て人は何か一つの考えを持つている。何か信ずる所があつて、それを中心に生きている。ところがその考えが、ごく皮相な浅薄なものであると、何か大事に出会ふとみな打ちくだかれてしまうのである。平和に暮した夫婦の間でも、一朝愛子が死んだ時、今までの幸福も、考えも、持つていた自信も打ち崩れて、まるで人生に対する考えがちがつて来る。私は先日〇県視学にお出会ひした。〇県視学は私の常に崇敬している方でありますが、先生は近頃坊ちやまを急に一人亡くされて、悲しみにひたつていられました。先生は私に「常に自分に対して慰安と幸福を与えてくれた子供に対して、自分はあまりに力ない父でありました。ただそれだけを考えています。自分どもは色々と考えも持つていましたが、それは概念でありました。こんなことに出会ふと打ち砕かれてしまいます。私は私の心の方向をどう取つて行けばいいかと考えています。」と。先生のお言葉を聞いていた者はみな涙しました。

苦を背に、楽を前に追いかけて行つていますが、この生活は、目を外にむけた日暮しです。目を外につけて、もつともつと求めて行く者には、今少し幸福であつてもいいはずだとそれだけが考えられています。果してそれでいいでしょうか。

苦を金の力で如何ともすることが出来ない時、楽も金力では買えないのです。従つて毎日金だけを追うている日暮しは迷いの日暮しであります。

「泣くは我、涙の種はむこうから」といいますが、情の世界は誰でも同一であります。親子の死に対しては誰でも泣きます。頭で作つた考え即ち概念は情の前には何の力もありません。

私は悲しい時には天を仰ぎ、地に伏して泣きたいのです。嬉しい時には打ちよろこんで笑いたいのです。涙の世界を味わいつつ、如実に泣きつつ、笑いつつしながらも、そのままがつと大きなものに合していただきたいのです。

親鸞聖人は「諦めよとは聖追白力の心持ちか、諦めなくてもいい、泣いてもいい笑つてもいい。ただその中にも、如来様が一緒に泣いていて下さることを忘れないで如来様と一緒に泣け」といいました。

衆生苦惱我苦惱、衆生安樂我安樂。

人間苦にほんとうに泣いた人でなくては、人生に対する深い智慧は生れませぬ。酒宴の華さが人生でもありません。結婚式だけが人生ではありません。H女様は、今医師から死の宣告を受けて病床にいます。白髪のお婆あ様がたつた一人、H女様を杖とも柱とも思つて、貧しい中から勉強させてやつと職業婦人にしたばかりの花の蕾です。心ばかりはまだ確かであるH様の枕辺に「この娘が今に死んでくれたら、私には何もなくなります。」と泣き伏す老婆を見た時、何と挨拶のしようもありませんでした。

苦しみは私たちにほんとうの人生を教えてください。死を我が事に考えた時には初めて何をなすべきかに目覚めます。

「仏心とは大慈悲是れなり。」と観無量寿経にあります。大慈。拔苦、これを大慈という。拔苦とは苦を抜くことです。一切衆生の苦を抜きたい心が**大慈**であります。大慈。与楽、これを**大慈**という。与楽とは発しみを与えることです。一切衆生に樂しみを与えてやりたい仏の心であります。人間苦に没入して泣いている私どもの心にふれてゆく時、それは罪そのものであります。迷いそのものであります。

「自身は現に罪悪生死の凡夫……」

善導大師の悲痛な言葉、現に、今、が迷いの凡夫であります。

人間苦、罪悪、宿業、そうした自分に目覚めた時、自分どもの小さい考えは打ち砕かれて、魂はもつと大きな世界を求めて来ます。現実、今、灰色な自分を見出す者は、その過去と、その未来と共に罪であり、苦悩であり、地獄であることに泣くのであります。こうした苦しみの世界から出て行きたいその願いはつきりして下さる者は仏であります。私どもの魂は仏に向って動いて来ます。それは即ち大菩提心であります。

南無阿弥陀仏。歸命無量寿如来。南無不可思議光如来。いづれも同じことであります。

生きたい、生きぬきたい。百年。千年。万年。かくて永遠に生きたい。

光明がほしい。光がほしい。大きな光がほしい。一切の悩みから救われた無量光がほしい。

阿弥陀如来は、光と寿との無量なる仏であります。

我等が悩みの底から動き出るところの、一切苦から救われたい願望、即ち大菩提心は、そのまま、光明無量、寿命無量を求める心であります。

法蔵菩薩の願心、阿弥陀如来の大慈は、そのまま私どもの魂の底に動き出るのであります。大菩提心は仏心であります。

聞きましょう。聞きましょう。聞くことによつて如来のみ声は、はつきりして来ます。み仏の勅命にふれきつた時、一念歸命の信心は生れます。今現に悩みつつある我等の魂の底に流れたもう、大慈の光明に接しなければなりません。衆生苦悩我苦悩と泣き、衆生安樂我安樂と笑みたまう大慈大慈の生きた仏は、生きて苦しむ我等に來たつて、真実の幸福、永遠の大樂を与えるために、招喚の勅命を微塵世界に送つていきます。

人間苦はここに真の意義があります。人間の力を打ち砕かれた時、永遠に変わらぬ仏心に目覚め、大慈の招喚の勅命に丸められた真生命に目覚めるのであります。人間苦に泣いて大慈に笑うのであります。迷いに死んで、み仏に生きるのであります。

「先死の苦海ほとりなし ひさしくしづめるわれらをば

弥陀弘誓のふねのみぞ のせてかならずわたしける。」(和讃)

私どもの内に起る信心は、すぐそれがみ仏の心であります。生命さながら出で来る念仏は、それがそのまま、み仏の招喚の声であります。私の永遠の大生命であり、永劫の白道であります。

かくて私はもう単なる人間的な樂を追うてのみ走る奴隷ではありませんせぬ。

「うきことこのなほこの上につもれかし、かぎりある身の力ためさん。」

信は力であります。力とは苦を突破する力であります。真実に生ききる力であり、苦そのものに顔をむけて進みましよう。苦に突入する時、樂は後より来りません。人生には、忍受することの出来ないほどの苦はありませぬ。山なす大波も、数万吨の大船は打ち破って進みます。山なす大波、それを打ち破って行く力は唯、信仰によつて生れます。翻弄された私どもは、あらゆる人間苦に、みじめな一生であつてもいいのであります。内なる世界を有する者には、如何なる時にも輝く価値世界を持っています。

一歩一歩がお浄土である。それはひいて永遠がお浄土であります。

金は方便であります。生命ではありません。方便をはなれることは出来ないからお金儲けも致しましょう。けれども方便と生命とをとりちがえて、方便のみに迷つて、生命、永遠の生命にふれずに死ぬることは悲しい無意義なことであります。

念仏行者の生活は、そのままが報謝の日暮しであります。報謝の生活は、嬉しい精進努力の生活であります。精進努力の労働には、そこに、金も物質も生れます。生れた財物に養われつつ、内なるよろこびに生きてゆきます。

「もつと幸福であつてもいい。」という声は、内なる世界をもたない人の言葉であります。

自分の悪業や、罪惡を深信する者は、微かに浮ぶ、慶喜の世界を歩ませて頂きます。